短　報

‘看護覚え書’にみる新型コロナウイルス（COVID-19）

豊田　久美子

新型コロナウイルスは世界の人々の日常生活を脅威に陥れた。人類にとってこの未知のウイルスは、治療はもちろんワクチンすら開発の途上にある。WHO は５月５日（12 時 48 分、現地時間）において、世界の感染者数 3,582,469 人、死者は 251,365 人と公表した。

近年の医療技術の進歩は目覚ましく、生体臓器移植、新薬の開発、ES 細胞、AI などを取り入れ、完治困難とされたがんの制圧さえ時間の問題と思われる勢いであった。ところが、この新型コロナウイルスの脅威によって、我々は常に未知のウイルスと闘い、共存していることを否応なく思い知らされたのである。

1860 年、F. ナイチンゲールは今や看護学を学ぶ者のバイブルとも言える‘看護覚え書き’を記している。しかし、その著書は、看護師のためのマニュアルではなく、他人の健康に直接責任を負っている女性たちに考え方のヒントを与えたいという目的で記されており、日々の健康上の知識や看護の知識は、誰もが学ぶべきであると述べている。

序章において、‘私はほかに良い言葉がないので看護という言葉を使う。看護とはこれまで、せいぜい薬を飲ませたりシップ剤を貼ったりすること、その程度の意味に限られてきている。しかし、**‘看護とは新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えることーこういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするよう整えること、を意味すべきである。’**

‘生命力の消耗を最小にする’すなわち‘自然治癒力を最大限に高める’とも言い換えることが出来よう。さらに、‘細々としたこととはいえそれは生死にかかわること’として、いかに、日常生活を整えることが重要性であるかを説いている。

さらに、第一章では、「換気と保温」を掲げ、‘看護の第一原則は屋内の空気を屋外空気と同じく清浄に保つこと’を説いている。‘良い看護が行われているかどうかを判定するための規準としてまず第一にあげられること、看護婦が細心の注意を集中すべき最初にして最後のこと、何をさておいても患者にとって必要不可欠なこと、それを満たさなかったら、あなたが患者のためにするほかのことすべてが無に来するほどたいせつなこと、反対に、それを満たしさえすればほかのすべて放っておいてよいとさえ私は言いたいこと－それは、**《患者が呼吸する空気を、患者の身体を冷やすことなく、屋外の空気と同じ清浄さに保つこと》**なのである。

発刊から 160 年たった今、我々が学ぶべきことのすべてが記されていることに驚きを禁じ得ない。近年、ほとんどの建物、家屋にエアコンディショナーが設置されるようになり、空気の清浄さに気を配り換気を小まめにする生活をどこかに置き忘れてはこなかっただろうか。新型コロナウイルスの感染予防の決め手は、感染源の除去・感染経路の遮断であり、その大きな要素として密室を避けて適度に換気し、空気の清浄化を小まめに行い、手洗いの励行をはじめ、細々とした日常生活を整え、免疫力を高めることである。

また、F. ナイチンゲールは祖国イギリスでは‘統計学の先駆者’として知られており、クリミア戦争の兵士の戦死者・負傷者に関する膨大なデータを分析し、戦闘で受けた傷そのものでなく、傷を負った後の治療や病院の衛生状態の不十分さに原因があることを明らかにし、‘看護の質を上げること’によって死亡率を激減させたことで知られている。さらに、国際的に病院統計の取り方を標準化することを提案し、有効な比較分析をもとにした医療技術へと導いたと伝えられている。豊かな現場の経験と統計の知識、さらに看護への揺るぎない信念による功績であり、この度の感染管理への道標となっていると言えよう。

F. ナイチンゲールの著書‘看護覚え書’は、人類もまた自然環境の一部であることを自覚し生態系を護り、ライフスタイル・社会の在り方そのものを見直す大いなる機会とせよ！と啓示しているように思えてならない。

文献

Flolence Nightingale（1860）／湯槇ます．薄井坦子. 小玉香津子訳（1968）．看護覚え書―看護であること　看護でないこと（第７版），東京：現代社.